

家・水・食糧・地域・リーダー……あなたは大丈夫ですか？

自分のいのちは自分で守る 地域の力も欠かせない要件です

井野盛夫さん(富士常葉大学環境防災学部教授)

井野盛夫さん(いのもりお)
富士常葉大学環境防災学部教授。
静岡県防災局長、静岡県防災情報
研究所長、富士常葉大学環境防災
学部長を経て現職。研究分野は防
災行政、地下水理。

Q● どういう狙いで防災力調査を提案されたのですか。

A● 「我が家の防災力調査票」をすることによって(2ページに掲載)、行政が30年間対策を進めてきたことが具体的に検証できるからです。東海地震は、起こる起るといわれながら、これまで起きていません。ということは、地震対策をしてきた人とそうでない人の違いを知ることができないわけです。しかし、この10の質問によって、完全とはいえないものの取り組みが見えてきます。調査票の中に、まったく知らない言葉や内容があったら、関心がなかったか、地震災害に対して消極的だということに

なります。

防災では「自分のいのちは自分で守る」ということが大前提です。しかし、災害が起きてもなんとかなるだろうと考えている人が少なくありません。いのちを守ることの大切さに気づいていくことがこの調査の狙いなのです。

Q● この調査結果からどんなことが分かりましたか？

A● 「ラジオや照明器具を準備してある」という答は多いのですが、これは、地震のために準備したというよりも、たまたまあったということだと思います。いちばん低かったのは「8」。つまり、炊き出しが必要な状況を想定していないということ。極端な言い方をすれば、着る物も食べ物も飲み物も、行政や全国各地から届くと思っていることになるでしょう。それに、近所の人といっしょに作って食事をすることを嫌がる方もいます。

防災力の達成率が55%というのは、県や市町が30年取り組んできたことが、なかなか家庭にまでは浸透していない

ことになるでしょう。公共施設の耐震工事やブロック塀のフェンス化などは行政主体でできますが、各家庭での対策を高めることは容易ではないということです。

ほんとうに困っている人に
手を差しのべられる
地域にする

Q● 基本的なことになりましたが、自主防災組織についてお話しただけですか。

A● 自主防災組織は昭和53年に、東海地震対策として、緊急に町内会を中心に作られました。既存の町内会組織に付け加えたということです。そこに問題があります。したがって、30年経った今でも、その取り組みが徹底していないところがあります。現実には地震が起こった時に、ボランティアなどのように連携するかなど、問題があります。それと人々の町内会離れも危惧しています。

また東海地震で、日本の9割の人は被災しないとして、その中から高齢者や幼児など災害発生時の弱者をはず

すと、かなりの人が残りますが、その残った半数が女性だということを考慮すべきです。つまり女性の力を織り込まないとうまくいかない、ということ。所によって、自主防の中に女性のリーダーが出てきますからこれがもつと広がって、地域の核となっていくことがとても大切だと思います。

Q● いま、災害時の弱者のことが出てきました。そのへんをもうすこし……

A● 我が国には、災害救助法という、災害により被災者となった国民のいのちを最低限守ることを保障する法律があります。これにしたがって、住む場所・食べる物・着る物・学用品・葬儀費用などが支給されます。この法律は、昭和22年にできて以来、内容が年々レベルアップされており、生きるための最低限のことは公共がやることになっていきます。住んでいる人間を思いやるようなどころまでは、法律はふれていません。

たとえば阪神・淡路大震災で、こういうことがあったそうです。2000人の避難地に、地震発生直後、1500個の弁当が届きました。その対応策は、「不足分の弁当が来るまで出さない」です。足りない状態で配布したら大変なことになります。飢餓状態まで追い込まれると、元気な人が2個も3個もとって、弱者には弁当が届かないということも起こるかもしれません。

つまり避難所でも、弱者ほど不利になる危険性が予測できるでしょう。その結果、危険な家に戻ったり、他の場所で生活することにもなりかねません。

NETWORK ねっとわあく 2007.10.1.

■「我が家の防災力調査票」の途中結果■

「はい」と答えた人の割合(達成率)と割合×配点(評価点)

	回答者294人	配点	達成率	評価点
1	住宅の耐震性	2.0	53%	1.06
2	家具の固定	1.0	48%	0.48
3	飲料水の備蓄	1.0	71%	0.71
4	ラジオ等の確保	0.5	91%	0.45
5	地震情報の認知	1.5	39%	0.88
6	警戒宣言行動	1.5	31%	0.47
7	救護所の認知	1.0	57%	0.57
8	炊き出しの認知	0.5	35%	0.18
9	避難所の認知	0.5	78%	0.39
10	支援物資配給場	0.5	58%	0.29
	合計	10.0	55%	5.48

(2007年6月25日取材)

Q ●被害を最小限にするため、いますべきことはなんですか?

A ●「地震防災ガイドブック」の対策編に書かれている、非常持ち出し袋を用意したり、備蓄や家の耐震診断をすることです。つまり、住民として防災力を上げることです。当然、行政だけでは限界があるので、「自分のいのちは自分で守る」ということを、一人ひとりが自覚することが重要です。非常食や水を蓄えるなど、小さなことを積み重ねて

震災を乗り越えられる地域の力を高めること

また、病院へ来て助けを乞うことができないほど重い症状の人もいます。こういう人たちを見つけて、手を差し伸べるのが大切です。ほんとうに困っている人を見つけて、温かいスープなり布団なりを提供できるような地域づくりが不可欠だと思います。

いかなければ、いつまで経っても変わらないのです。

中でも家を補強することは、とりわけ重要です。災害後の仮設住宅として使えますし、家がつぶれたら後片付けやごみの処理にお金がかかります。壊れた住宅が道をふさぐこともあります。ですから、家を壊さないということが防災の基本です。行政が耐震工事にいままもお金を出しているのは、そのためです。

家を守るということは、自殺者を出さないことにもつながります。もともとあつたコミュニティが壊れて新たに自分の居場所をつくれな人が、独りぼっちになって絶望したり病気が悪化して自殺に向かうと考えられるからです。このように家が壊れ、町が壊れるということは大きなダメージとなります。ですから、まず耐震診断をすること、そしてクチコミで診断する人を増やしていくことが大事です。

もうひとつ大切なことは、信頼し合える人間関係を、あちこちにつくっておくことです。阪神・淡路大震災では、社会不安の拡大を防ぐために、泥棒が集結したとか、窃盗事件・レイプ事件・多数の自殺などの事件報道が規制されましたが、大地震が起これば、静岡でもそういうことはありうるでしょう。これらを未然に防ぐために、行政でもできる限りのことをしてきました。しかしそれ以上に効果的なことは、良識・良心のある人がリーダーになって、住民一人ひとりが協力し合い、地域の安全・いのちを守っていくこと。この地域のこと、地震を乗り越えられる大きな力となっていくのです。

いつかやってくる その日に備えて

女性の視点から防災・被災を考える特集、いかがでしたか。

あなたの家の「防災力チェック」、何点になりましたか。

☆家の耐震化こそが いのちを守る

☆地域力が救援の要になる

☆自主防災活動などへの女性の参画が大切 などなど、いろいろなかことが見えてきました。

この記事編集している最中には、中越沖地震も起きました。

東海地震は、

いつか必ずやってくるといわれています。防災体制は日本一進んでいるといわれる静岡県ですが、社会システムと同時に、個人の防災力も不可欠ですね。

阪神・淡路大震災、中越沖地震その他から学べることを生かすとともに、高齢者・障害者・女性など要援護者への対策にも、いま一度、目を向けていきたいですね。

だれもが、

自分のいのちを、自分で守り、みんな、みんなのいのちを守るように、あらためて日常の暮らしを見直してみませんか。

今回の取材に、

快くご協力いただいたみなさま、ほんとうに、ありがとうございました。

静岡県県民部男女共同参画室からのお知らせです

ご存知ですか？



男女共同参画社会づくり 宣言事業所・団体

静岡県は、男女共同参画の推進に取り組んでいる企業等を応援するため、平成19年4月に「男女共同参画社会づくり宣言推進事業」をスタートさせました。従業員・職員の個性と能力の発揮や育児・介護と仕事の両立支援などに積極的に取り組むことを代表者が「宣言」し、県はホームページや広報誌等を使って、その取組内容などを広くPRします。

9月13日現在で67の事業所・団体が「宣言」していますので、どんな事業所・団体がどんな宣言をしているかを、ホームページでぜひ御覧いただき、その取組を一緒に応援していただければ幸いです。

すべての人が、ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）のとれた、自分らしいライフスタイルを実現できるよう、皆様の御協力をお願いいたします。

男女共同参画社会づくり宣言推進事業ホームページURL

<http://www.pref.shizuoka.jp/kenmin/km-150/sengen/>



しずおか男女共同参画 推進会議の開催

去る8月6日、静岡県男女共同参画センター“あざれあ”において、様々な分野の民間71団体で構成された「しずおか男女共同参画推進会議・全体会」が開催されました。

はじめに、委員の互選により、静岡県社会福祉協議会会長の上島清介氏が会長に、NPO法人静岡県男女共同参画センター交流会議副代表理事の山田久美子氏が副会長に選任されました。

また、地域・家庭、教育、産業の各部会の代表がそれぞれ今後一年間の取組を宣言した後、今年度は、「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）」を可能にする環境整備に向けて、傘下団体や会員に対して、「男女共同参画社会づくり宣言推進事業」に積極的に取り組むよう三部会合同で宣言を行いました。

その後、「ワーク・ライフ・バランス：仕事に活力 生活にゆとり」と題して、東京大学社会科学研究所教授の佐藤博樹さんによるトップセミナーを実施しました。

Work
Life
Balance

あざれあの出前講座

あざれでは、男女共同参画を推進するための講座を開催していますが、本年度は企業、学校等へ出向いて講座を実施する出前講座を拡充して実施します。

事業所出前講座

男女共同参画社会の実現に向け、事業所における男女共同参画に対する理解を広め、その取り組みの推進のため、セミナーや講座の開催などを支援します。

- ・中部電力株式会社静岡支店 (9月実施済み)
- ・静岡県生活協同組合連合会 (6月実施済み)
- ・株式会社資生堂掛川工場 (9月実施済み)
- ・基金労組静岡支部 (調整中)

学校、PTAとの協働講座

ジェンダーに敏感な意識をもって男女の人権と個性を尊重する教育推進のため、児童・生徒、保護者を始め教職員を対象に各学校のニーズに合った形で講座を開催します。

- ・静岡市立南中学校 (6月実施済み)
- ・磐田市立磐田南小学校 (7月実施済み)
- ・県立磐田北高等学校 (10月11日)
- ・静岡市立清水第四中学校 (10月18日)
- ・掛川市立第一小学校 (10月23日)
- ・浜松市立蒲小学校 (11月18日)
- ・島田市立六合中学校 (11月19日)
- ・静岡市立清水第六中学校 (11月29日)
- ・島田市立金谷中学校 (12月7日)
- ・磐田市立神明中学校 (12月13日)



DV防止出前講座

学生等を対象に、将来的に加害者にも被害者にもならないよう、DVについて学ぶ講座を大学等と協働で開催します。

- ・静岡英和学院大学短期大学部 (7月実施済み)
- ・聖隷クリストファー大学 (9月実施済み)
- ・静岡県立大学短期大学部 (12月で調整中)
- ・静岡大学 (調整中)
- ・静岡県立大学 (調整中)

地域カレッジ

男女共同参画社会の形成を推進するために、地域の特性に合った方法で、市町や団体と連携して講座を実施し、地域住民への男女共同参画意識の浸透を図ります。

- ・三島市 (11月22日、三島商工会議所会議室) 商工会議所会員の市内事業所等を対象
- ・島田市 (1月で調整中、おおるり) 30~60代の市民を対象
- ・牧之原市 (調整中、牧之原市総合健康福祉センター) 一般市民対象
- ・小山町 (1月27日、小山町総合文化会館) 一般町民対象
- ・掛川市 (2月2日、掛川市文化会館) 大東、大須賀地区の市民、女性団体、自治会役員等を対象

Book 本の紹介

★『女たちが語る阪神・淡路大震災』（復刻版）

震災直後の女性たちの、生の声を集めた貴重な記録です。災害時に何が起こり、どんな問題に直面するのか、マスコミの情報では知ることができなかった現状が、この本に詰まっています。なお、女性と災害に関する資料をまとめたものも出版されています。

各 800円 編集・発行:ウィメンズネット・こうべ

郵便振替口座にて申込みと共に、代金を振り込んでください。

口座番号 01110-7-66771 ウィメンズネット・こうべ 1010円(800円+送料210円)

問い合わせ TEL078-734-1308

e-mail :womens-net-kobe@nifty.com <http://homepage1.nifty.com/womens-net-kobe>



★『子どもを守る防災ワークブック』

読みながら防災について取り組めるワークブックとして、平成18年9月に発行。防災基礎知識や付録として便利グッズの作り方、我が家の防災対策シートなどを掲載。鶴飼さんの講座では、テキストとして配布されています。

編集・発行:NPO法人 はままつ子育てネットワークぴppi

問い合わせ: TEL053-457-3418

e-mail pippi@hamamatsu-pippi.net <http://www.hamamatsu-pippi.net>

51号のご感想をお寄せください。

本号のハサミ込みハガキ、またはe-mail、FAXでも結構です。

抽選で美術館招待券などを差し上げます。

FAX 054-251-5085

e-mail:kouryuukaigi@ka.tnc.ne.jp



post card

or



mail

or



fax



編集後記

編集委員

梅村 まどか

染谷 絹代

永島 京子

村田 美千子

安田 成希

アドバイザー

木村 幸男

●一人暮らしの学生である私は、調査票の点数が編集員の中で最低点でした。備えは今からでも間に合います。まずは、近所の方々にご挨拶することから始めようと思います。
(梅村まどか)

●ストレス・怒り・恐怖心など、とくに女性の被災者が抱える心理的的重圧は想像以上に深刻でした。災害は、日ごろ見えない人間関係をもあぶり出します。まさに日常が問われていると実感しました。
(染谷絹代)

●地震はもちろん怖い。でもその後女性に襲いかかるさまざまな問題はもっと怖い。だけど、それを少しずつでも解決するよう努めるべきです。防災対策を軸に、人を大事にする町づくりをしたいものです。
(永島京子)

●個人の意識の持ち方で、よくなっていくヒントがたくさんありました。防災という部分でも、女性だからこそ気づけること、考えられることに真剣に向き合い、そして発信していくことが大切です。
(村田美千子)

●これまでは、身近に起こりうる災害を、どこかで他人事としてとらえていました。人間のモラルや二次災害など、取材を通して一人ひとりが、問題意識を高く持つことが大事だと感じました。
(安田成希)



ねっとわあく

Vol.51

監 修/静岡県男女共同参画センター
 発 行 日/平成19年10月1日
 住 所/〒422-8063 静岡市駿河区馬淵1丁目17-1
 T E L/054-250-8107 FAX/054-255-9266
 発 行/あざれあ交流会議グループ
 編集協力/esplanet! すずきえいこ